

湛然述『法華經大意』の真偽問題

松 森 秀 幸

一 問題の所在

本稿は、湛然（七二一—七八二）述『法華經大意』の真偽問題を考察することを目的とする。本書はその冒頭に、

將釈此一部妙典二十八品、多有諸宗。今暫歸天台宗。每品用三門解説。第一述每品大意、第二釈每品名、第三釈每品內文、略科斷^①（統二七・五三二上）

とあるように、『妙法蓮華經』二十八品を「天台宗」の立場から、品ごとに「大意」（品の大意）、「釈名」（品名の解釈）、「入文判釈」（品の科文）の三部門に分けて概説する。

本書に関する先行研究は、中里貞隆氏、塩入亮忠氏、日比宣正氏、Linda Penkower氏によるものがある。^②なかでも注目すべきは、日比氏が『法華經大意』と、その異本ともいえる『法華經二十八品由来』（以下『由来』）、『法華經大意抄』（以下『大意抄』）の二書との関係を『法華經大意』の準備稿として位置づけた点である。日比氏は「釈名」の段が『法華文句』

（以下『文句』）からの抜粋であることを根拠にして、少なくとも「大意」「釈名」「入文判釈」がそろったものは湛然撰述ではないとしている。^③日比氏をはじめ、他の先行研究も『法華經大意』が湛然の著作であると見なすことについて、基本的には懐疑的な立場に立っている。しかし先行研究のいずれも、湛然の撰述であるとする伝統的な考えを否定するにたる十分な根拠がない以上、安易に真偽問題に決着をつけることはできないとして、おおよその見解の一致を示している。

筆者も先行研究のこの慎重な態度に賛同するが、本書の真偽問題は十分に検討されつくしていないと考える。そこで『法華經大意』の「大意」「釈名」「入文判釈」の三段をそれぞれ検討し、本書の真偽問題を考察してみたい。

二 「大意」における「五姓」の概念

「大意」の段は、中里氏が「慈恩家を對手とするが如き口吻が所々に散見せらるる^④」と指摘しているように、法相唯識

学派の学説を象徴する「五姓」という語が四か所で用いられている。本章でははじめに「大意」における「五姓」の概念と他の湛然の著作とされる文献における「五姓」の概念とを確認し、両者の比較を通して「大意」における「五姓」の概念の特徴を明らかにしたい。

はじめに方便品の大意に次のような一節がある。

一大金鳥、照五姓而輝輝、四一銀兔、臨七人而皎皎。（統二七・五三三上）

引用文中の「金鳥」と「銀兔」とは、それぞれ太陽と月を譬えたもので、「大」と「四一」とは、それぞれ方便品の教説である「一大事因縁」と「教行人理の四一」のことを指している。また「七人」とは『法華玄義』（以下『玄義』）の「七種方便」（大三四・六八三上）と同義で、人・天・声聞・緣覚・藏教の菩薩・通教の菩薩・別教の菩薩のことを指すと考えられる。したがって「七人」と対句関係にある「五姓」の意味は、人・天・声聞・緣覚・菩薩のことを指していると推測できる。

また譬喩品の「大意」では次のような「五姓」の用例がある。十方諦求、更無余乘。誰留三乘。十方仏土、唯一一乘。誰存五姓。謗人謗法、受殃三途。求友求法、与祥於万代。（統二七・五三三上）ここでは「三乘」と「五姓」とが対句表現として用いられており、三乗と五姓の間に深い関係性を見てとれる。いわゆ

る三乗方便・一乘真実という天台側の法華經理解に基づけば、「三乗」に譬えられる声聞・緣覚・菩薩のための教えはすべて方便という範疇に規定される。したがって、ここでの「五姓」という枠組みの全体も方便という範疇に包含されることになる。その意味ではこの五姓も先の例と同様に五乗に対応したものと考えることが妥当であろう。

このように「大意」で用いられる「五姓」の内容は人・天・声聞・緣覚・菩薩の五乗を指すものと考えられ、直接的に法相唯識学派を示した表現とはいえない。

次に他の湛然の著作における「五姓」の用例を確認する。

湛然の著作において「五姓」という語は『法華五百問論』と『法華文句記』（以下『文句記』）において確認できる。『法華五百問論』には次のような一節がある。

豈可聞五性、便謂人天二乘永無。觀一性宗、乃言一切皆有。（統五六・六〇三下）

引用文は『法華玄贊』に対して論難する内容の一部である。ここでは「五性」説にもとづき人・天・二乗が成仏できないとするのは誤りであり、「一性宗」の立場から一切衆生に仏性があるというべきであると指摘している。ここでの「五性」は、一切衆生に仏性を認める「一性宗」に対応して用いられており、法相唯識学派のことを指していると考えられる。次に『文句記』では下記のような用例が確認できる。

依五性宗中、以見疑無明等種子為無明住地。今意不爾。(大三・四・一八七上)

上記の引用文中の「五性宗」とは、「今意不爾」と否定される「五住」に関する他の人の説の中に見られる。「以見疑無明等種子為無明住地」とは、『成唯識論』の記述(大三・四八下)を指すと考えられるので、ここでの「五性宗」とは唯識学派の所説を指していると考えられる。また「五性宗」の「五性」について、唐代の注釈書である道暹の『法華經文句輔正記』では、「人天種姓」「定性声聞」「定性緣覺」「不定種姓」「菩薩種姓」の五つであると規定している(統二八・六七〇上)。この「人天種姓」とは無漏の種子がない、人天の果報を成就する有漏の種子のことと規定されており、「無性」と同義である。『文句記』の記述だけでは、「五性」が具体的に何を指すかは明確ではないが、上記の注釈に基づくと、『文句記』で先に引用した部分の「五性」の語も、声聞・緣覺・菩薩・不定・無性の「五性」を指すと考えることが妥当である。したがって「五性宗」という語は、法相唯識学派を指していると考えられる。

三 『法華經大意』の「釈名」の特徴

本書の「釈名」の段において、他書からの引用が全く確認できないのは、五百弟子受記品、藥王菩薩本事品、觀世音菩

薩普門品、妙莊嚴王本事品の四品であり、それらの「釈名」は、共通の形式に則って注釈されている。たとえば藥王菩薩本事品の「釈名」には「第二釈名者、藥王菩薩者、挙人也。本事者、標法。此品人法双举、故言藥王菩薩本事品」(統二七・五四六中)とある。ここでは藥王菩薩本事品の品名を「藥王菩薩」と「本事」とに分け、それぞれを人と法に対応させて、人と法との両方を挙げているので「藥王菩薩本事品」となると、形式的な注釈をしている。

「釈名」は『文句』『玄義』からの引用が大半を占めるが、それらの引用でない部分に関しては、ほぼ同様の形式的な注釈で構成されている点が大きな特徴といえる。

四 「人文判釈」における科段の独自性

「人文判釈」では『法華經』の略科段が示されている。全体的には『文句』に示される『法華經』の科文を踏襲していると考えられるが、『文句』の記述と『法華經大意』の「人文判釈」を比較してみると、細部では両者に相違する個所が少なからず確認できる。

寿量品の冒頭部分の科段は、『文句』よりも「人文判釈」の方が詳しい。「人文判釈」では次のように科段を規定している。

第二明広開近顕遠段。約中大段有二。第一明如来誠信、第二明如

湛然述『法華經大意』の真偽問題（松 森）

来正答。約第一段中有四。從品初下、第一明如來之誠。從是時菩薩大眾下、第二明菩薩三請。從復言唯願說之下、第三明菩薩重請。從爾時世尊下、第四明如來重誠。（統二七・二〇八中）

上記の引用文中では、「如來之誠」「菩薩三請」「菩薩重請」「如來重誠」のそれぞれが、具体的に經文のどこからどこまでに対応するかを明確に規定している。これに対し『文句』では、

広開近顯遠、文為二。先誠信、次正答。……此文有三誠三請重請重誠。（大三四・一二九中）

という記述があるだけで、「三誠」「三請」「重請」「重誠」が經文のどの部分に対応するかまでの具体的な言及はない。

また『文句記』では、『文句』のこの部分の記述について「此品文句、疏文稍繁、前後難見、故前錄出。」（大三四・三三二下）と述べて、続いて『文句』の寿量品の科段に関する記述を抜き出して記載しているが、そこでは「三誠」「三請」「重請」「重誠」についてはまったく注目されていない。「入文判釈」において經文を具体的に提示しているのは、「入文判釈」が『文句』や『文句記』の記述に全面的に依存して科段を作成したのではないことを物語っているといえよう。

五 結びに

以上の考察を踏まえて、本書の真偽問題に関する筆者の考

えを述べたい。

まず「釈名」の段について、日比氏が引用書目に基づき湛然の著作とは考えにくいと論じているが、本稿では「釈名」の中で他書からの引用が確認できないものに言及した。それらはいずれも形式的な注釈で、他の湛然撰述の注釈書における注釈態度とは異なるものである。したがって「釈名」の段は湛然の撰述とは考えにくいといえる。

次に「入文判釈」について、本稿では「入文判釈」が『文句』や『文句記』の記述に全面的に依存するものではないことを確認した。『法華經大意』の科段は冒頭で略科段と規定されているが、実際には『文句』や『文句記』よりも細かく科段を規定している部分がある。湛然が『法華經』に対して『文句』の科段より詳細な科段を規定した場合に、その研究成果を『文句記』に反映させないとは考えにくい。また『法華經大意』が『文句記』の撰述以降に著されたものであったとしても、『文句記』で新たに示した科段を「入文判釈」において提示していないことも不自然である。したがって「入文判釈」も湛然の撰述という可能性は低いと考えられる。

最後に「大意」の段について、本稿では「五姓」という語に注目して、本書における「五姓」の概念と、湛然の他の著作における「五性」の概念とについて検討した。『法華經大意』以外の湛然の著作とされる文献では、声聞・緣覺・菩薩・

不定・無性を指して「五性」と規定していると考えられ、この点は『法華經大意』における「五姓」の用例と一致するとはいいがたい。したがって、本稿で検討した範囲において、「大意」の部分は他の湛然の著作との一貫性がないと判断できる。この一点だけをもって真偽を確定することは難しいが、「大意」の段も湛然の著作としてはかなり疑わしいといわざるをえない。

1 知恩撰『金剛般若經依天親菩薩論贊略釈秦本義記』(大八五・一一〇下)には、科文を「科断」と表現する用例がある。

2 筆者は「湛然述『法華經大意』の研究」を『創価大学大学院紀要』(第二七集、二〇〇六年一月刊行予定)に掲載する予定である。先行研究に対する筆者の紹介と批評は拙論を参照されたい。

3 日比宣正『唐代天台学序説』(山喜房仏書林一九六六年)四八〇頁を参照。

4 中里貞隆「法華經大意」(『仏書解説大辞典』第一〇巻所収大蔵出版社一九三二年)四二頁を参照。

5 「俗典中云、月中有兔、日中有鳥」(大四六・七三四下)

6 この他、藥草喻品の「大意」の段で「五姓」の語が用いられる。そこでは「五姓」と「五乗」とが対句表現として用いられている。

〈キーワード〉 湛然、『法華經大意』、真偽問題、天台宗

(創価大学大学院)

湛然述『法華經大意』の真偽問題(松 森)

First, I would like to draw attention to the fact that in *Gongde liyi miao* (功德利益妙), the tenth of the ten categories of *Miao* (妙) of *Jimén* (迹門) described in the *Fahua xuanyi* (法華玄義), it is indirectly written that the profits of perfect teaching *Yuanjiao xiangsi ji* (円教相似即) are equal to the profits of *Shibaodu-ren* (実報土人), and at the same time, are also equal to the profits of *Ershiwuyou* (二十五有), including the lowest hell.

Next, quoting a passage from *Xingmiao* (行妙) in the *Fahua xuanyi* in which the *Wuzuo sisi* of *Huishengxing* (慧聖行) is described, I will state the relation and structure of *Yuanjiao xiangsi ji* and all living things that receive it, showing that by entering *Huanxidi* (歡喜地), the above-mentioned profits of perfect teaching *Yuanjiao xiangsi ji* show the full extent of their abilities.

The perfect teaching is a teaching for superior bodhisattvas; but on the other hand, perfect teaching is a sufficiently great teaching to help those in the lowest level of hell.

Therefore, by actively relating to the lowest level of beings, *Shibaodu-ren* conquers his ignorance, helps the promotion of the Middle Way, ignorance and the Middle Way are tied together, and there is an increase in the power to take away *wu* (無). This is the structure of profits and merit of *Yuanjiao xiangsi ji*.

22. The Authenticity of Zhanran's *Fahuajing dayi* (*Outline of the Lotus Sutra*)

Hideyuki MATSUMORI

This text was composed of three sections, “Outline of the chapter of the Lotus Sutra”, “Interpretation of the chapters’ names”, and “Analytical division of the *sutra*”. Even though there have been several researches on this issue, the problem has not been resolved.

In this paper, I consider the concept of “the five natures” in the first section, the characteristics of the interpretation of the chapters’ names of the second section, and the difference between the analytical division of the *Fahua wenju* and that of the third section.

According to my research, the text does not seem to have been written by Zhanran.

23. Tiantai Zhiyi's conception of "li" (理)

Akihiro KASHIWAGURA

This thesis argues against the idea that "where there is principle (*li*) it is *dhātu-vāda*, and that is not Buddhism." As far as Zhiyi (智顗) is concerned, he does not perceive that principle exists separately from self. For him, there is no self that beholds principle, and no principle that is observed; principle is recognized in a state beyond existence and nonexistence. Zhiyi's concept is that principle is not with others but with oneself and becomes evident while living within the teachings of Buddha's way. From the above points, it is possible to argue that for Zhiyi, the principle is not a perception that basically exists, and it is not *dhātu-vāda*.

24. An Investigation of Problems Related to Inserts from the *Vimalakīrtinirdeśa* in the *Weimonjing wenshu*

Hiroe YAMAGUCHI

The 28 scrolls that comprise the *Weimojing wenshu* 維摩經文疏 are one of the most important commentaries on the *Vimalakīrtinirdeśa* 維摩詰所說經 as translated by Kumārajīva 鳩摩羅什. Tiantai Zhiyi 天台智顗 completed his commentary of the sūtra's first eight chapters as far as the 25th scroll before his death, and the remaining three scrolls were subsequently completed by his disciple Guanding 灌頂. In these subsequent commentaries, sentences from the original sūtra are inserted.

According to the notes, the first 25 scrolls had been accurately preserved with the sūtra inserts intact. I can surmise with a reasonable certainty that they preserve Zhiyi's sūtra inserts very closely.

Problems do remain, however. There are many small differences between the *Weimonjing wenshu*'s sūtra inserts and the sūtra itself as it appears in the